

大阪錦繪新聞

第三十号



浪花画工
芭木芳瀧速

あけの角の芝居の大舞臺、櫓の火あふれて、
牡丹の花の火の松の玉の振り毛の上げさにはちやうどうりし
火がうつと、ありいづる大一座見物客の表木戸迄、張り
裂る程大入の群集、一同ト裏木戸の消防方、多人数
駆け付た、川竹の古来掃き入る氣色、此の事、
わんこと、毎て用意さる世と、亦舞臺の火の玉も、
恐る氣味の膽玉、さか火とも消して、
残り、獅子の野他事も、目出々
四月十九日、たて、囃子のあ
だいに、評判、も、藝に親王と
多見藏を、鑒言、聲満る中、に、或る願負、
見舞、して、金五子、内、贈、じ、竹木君、太夫、即、席、か
(火水とも、恐る獅子の勢、ひ、三、国、無、双、あ、ひ、膽、玉)
と、祝、し、な、ま、へ、ね、し、ろ、獅子、嬉、し、と、
力、幸、内、と、其、終、は、君、太、夫、へ、遣、へ、し、と、あ、ん

八尾善板